

～ 昨日の風 明日の風 ～
**経営コンサルタント
 独白録**

【第97回】 問われるスピード



戸敷 進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、(株)経営改善支援センター(福岡市、URL: <http://sien.co.jp/>) 代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家として、全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

個人的なFacebookに時折記事を投稿します。本当は毎日アップしたいのですがなかなか大変です。先日、こんな記事を投稿しました。

「48.9歳の国」

古い友人が久しぶりに電話をしてきました。近況を尋ね合った後、友人が昨今の国の有り様を含め世間の風景について愚痴り始めました。そして私にどう思うかと尋ねてきました。「まあ後20年位はこのグチュグチュが続くよ」「はあ？ どういうことだ」「あんな、1945年終戦の年の日本国民の平均年齢は大体26歳だった。1回目の東京オリンピックが開催される直前の1960年は29歳だ。我々が若かった頃の1980年が34歳。そして今日本人の平均年齢は【48.9歳】なんだ。つまり50歳近くのジジイババアの国なので俊敏には動けないし、新しいことにも取り組めない。テレビのニュースキャスターを見てみろ。南向きの縁側に座って日向ぼっこをしながら世間話をしているような連中ばかりじゃないか。当事者ではなく揚げ足取りばかりをしている姿は老人そのものだ。20年後俺たちを含めたジジイババア達が消えてからようやく次の風景が始まるんだ。まあ焦らないことだ」「うーん」しばらく友人は絶句しておりました。

(記事引用ここまで)

企業の変革速度格差

プライベートな投稿なのでくだけた表現になっていますが、現在の日本を客観的に見ると記事の通りになります。どうしても全体の平均年齢が高いため、意思決定や変革のスピードが遅くなります。特に社員の平均年齢を考えたとき、45歳以上の企業はなかなか現代のスピードにはついていけないようです。

IT機器の導入、運用、顧客のニーズ把握、新商品・新サービスの開発など企業が取り組まなければならない課題はたくさんあるのですが、企業によってその変革スピードに格差が存在します。

戦後、我が国の総人口は増加を続け、1967年に

は初めて1億人を超えましたが、2008年の1億2808万人をピークに減少に転じています。人口が増え、消費が増え、経済が右肩上がりの時代には全体の様子を見て後追いでも十分に対応ができました。「よそが取り組んでいるからそろそろ我々も始めようか」という速度で間に合っていたのです。ところが人口が停滞し一気に減少し始めた社会では、後追いや人真似では遅すぎます。

最先端を知る

社員の平均年齢が30代の企業は、組織風土や時代に対する対応力は目を見張るものがあります。古い世代からすれば軽い、甘いなどと言われそうですが、間違いなく彼らは時代に対応しています。時代変化は加速しているのです。従来の思考や仕組みの中では対応しきれないほど世の中は変わっています。

業界の最先端、地域の最先端で何が起きているのかを自分の目で確かめ、組織としてどのように対応するのか、スピード感を持って決定しなければなりません。アフターコロナ、ウィズコロナの時代が来る前に行っておかなければならないことは山積みです。

昭和の2割、昭和の8割

ベテランの会長や社長・経営幹部と話す時「昭和の2割、昭和の8割」という話をします。

「我々が過ごしてきた昭和の2割のやり方は正しい。しかし8割は捨てなければなりません。時代背景が違っているので昔のやり方を持ち出すと思わぬつまづきを起こします。働き方改革、価値観の多様化、モラハラ、パワハラ、セクハラなど従来の考え方とは異なるモノが我々を追い抜いているのです。正直、真面目、努力、向上心は本質的なモノなので若い世代に伝えなければなりません。同時に不用意に押しつけてはならないものがあります」といった内容です。

時に成功体験が変革の足を引っ張ることもあります。変革に必要な速度は勇気ある経営者の意思と組織風土によって決まります。